「銀河鉄道の夜」初期形・再考

―主人公の孤独と幻想空間の解釈をめぐって―

中野新治

はじめに

筆者は『日本文学研究第21号』（昭和60・11）の「黙示録としての『銀河鉄道の夜』―「初期形」への一視点―」において「銀河鉄道の夜」と聖書の黙示録の関連についてふれた。しかし、論旨の展開がいかにも不十分であった。此度、新しい知見を得たこともあり、全面的に稿を改めることにした。面目はかなりの程度改まったはずであるが、一部旧稿と重なる部分も残った。諒とされたい。

一

「銀河鉄道の夜」、とりわけその初期形は、多くの場合、作者宮沢賢治を作品に重ねることで読まれて来た。「ぼくはみんなから、まるで狐（きつね）のやうに見えるんだ」という言葉に集約される主人公ジョバンニの疎外感や孤独感は「社会的被告」（昭7・6・21母木光あて書簡）という自覚に生きた作者に重ねられ、共に「どこまでもどこまでも行く」ことを望まれながら姿を消す級友カムパネルラは、早逝した妹トシ、あるいは、思想的に訣別した親友保阪嘉内の投影と考えられた。ジョバンニの旅する「幻想第四次空間」は賢治のユートピア幻想の具象化であると指摘された。それぞれに十分根拠のあることである。特にジョバンニのカムパネルラとの悲哀に満ちた別離の経験に、賢治における「個から類へと自らを解き放つ」回生への契機を見る（佐藤通雅）[1]ことに、基本的には異論の余地はない。

「あゝ、さうだ。みんながさう考へる。けれどもいっしょに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまへがあふどんなひとでもみんな何べんもおまへといっしょに苹果（りんご）をたべたり汽車に乗ったりしたのだ。だからやっぱりおまへはさっき考へたやうにあらゆるひとのいちばんの幸福をさがしにみんなと一しょに早くそこに行くがいゝ、そこでばかりおまへはほんたうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ。」というメッセージは、誰よりもまず自己自身に向けて発せられたものであり、この言葉の延長線上に羅須地人協会時代の実践活動は存在したのである。後期形への大幅な改稿も、この物語のもつ作者と主人公の距離の近さが大きな要因となっていることは言うまでもない。

しかし、そうではあっても、この物語の読解に常に作者が呼び寄

せられねばならないわけではないだろう。大正末年には一応の完成をみたと考えられる初期形のテキストは、プレテキストとしての作者の現実によって支えられねばならないほどの危うい自立性しか持ちえていないとは思われない。むしろ、親友保阪との訣別、妹トシとの死別、実践活動の挫折等の作者の現実の圧倒的な存在感が読者を魅了し、それが物語の自立的な読みを妨げてきた側面は否定しがたいのではないだろうか。

たとえば、主人公の疎外感や孤独感に早くから注目した中村稔氏は「銀河鉄道が馳せるユートピアをかいまみるため、なぜジョバンニはそれほどまでに孤独でなければならなかったか」という問を提出し、作者と主人公を重ねる読みの先鞭をつけたが、その根拠として示されたのは「ああ松を出て社殿をのぼり／絵馬や格子に囲まれた／うすくらがりの板の上に／からだを投げだしておれは泣きたい」という「絶望」や、「くらかけ山の雪／友一人なく／同志一人もなく」という「わびしい感想」であった。[2] しかし、前者は初期形テキスト成立以後の実践活動のさなかで書かれた詩であり、後者はさらにその後、病臥の床で「雨ニモ負ケズ手帳」に書き留められたメモである。これらの表現にジョバンニの疎外感や孤独感の源を見出すことには明らかに無理がある。「ジョバンニの孤独」は実践活動以前に完成していたのであるから、むしろ、実際に「絶望」や「わびしい感想」を抱いた賢治が、にもかかわらず、後期形ではそれらを初期形よりも低いボルテージでしか主人公に反映させなかったことに注目すべきなのだ。

もし、作者の現実を呼び寄せるとしても、少くとも仲間から疎外された孤独な存在ということに関して言えば、賢治は決してそれを忌避してはいないことを改めて想起する必要がある。

あるとき一つの御城に参りました、（中略）その国の広い事、人民の富んでゐる事、この国には生存競争などと申す様なつまらない競争もなく労働者対資本家などといふ様な頭の病める問題もなく総てが楽しみ総てが悦び総てが真であり善である国でありました、決して喜こびながら心の底で悲む様な変な人も居ませんでした、（中略）王子は永い旅に又のぼりました、なぜなれば、かの無窮遠のかなたに離れたる彼の友達は誠は彼の兄弟であったからでありました、それですから今も歩いてゐるでせう。（「『旅人のはなし』から」）

わたくしはどこまでも孤独を愛し／熱く湿った感情を嫌ひますので／もし万一にもわたくしにもっと仕事をご期待なされるお方は／同人になれと云ったり／原稿のさいそくや集金郵便をお差し向けになったり／わたくしを苦しませぬやうおねがひしたいと存じます（「春と修羅」第二集序）

大都郊外ノ煙ニマギレントネガヒ、マタ北上峡野ノ松林ニ朽チ埋レンコトヲオモヒシモ、父母ニ共ニ許サズ、廃軀ニ薬ヲ仰ギ、熱悩ニアヘギテ唯父母ノ意僅ニ充タンヲ翼フ（「雨ニモ負ケズ手帳」）

「『旅人のはなし』から」は二十二歳、「春と修羅」第二集序は三十二歳、「雨ニモ負ケズ手帳」のメモは死の二年前、三十六歳のものである。明らかなように、生涯を通じて「孤独」はむしろ熱望されている。最初期の散文「『旅人のはなし』から」では、主人公は

これ以上望みえない理想的な国の王子であり、旅からの帰還時には父母から暖く迎えられながら、王位を継承することなく再び果てしない旅へと出発する。世俗的な幸福を甘受することを潔しとしない賢治の性向が早くも現われている。「春と修羅」第二集序には詩人ぎらいの詩人である賢治の屈折した意識を、「雨ニモ負ケズ手帳」の再起不能を自覚したメモには、生涯の最後まで出家願望を保持していた賢治の姿を見ることができる。

保阪やトシとの別れ、実践活動の挫折などが賢治の人生の大きなエポックをなしたことは明らかである。しかし、しかしそれにひきずられて、彼にとって「孤独」は悲哀ではなく深い安息の場所でさえあったことを忘れてはならないだろう。作者と主人公の距離で言えば、町はずれのこわれた水車小屋に一人住むゴーシュ（「セロ弾きのゴーシュ」）や、無人の元競馬場の宿直室に一匹の山羊と共に住む下級官吏レオーノ＝キュースト（「ポラーノの広場」）を、その最短の存在として想起する方がより自然なのである。

このようにして見てくれば、父の不在と罪の嫌疑に端を発したジョバンニの仲間からの疎外と町はずれの丘への逃避が、あの「『旅人のはなし』から」の主人公の王子とは対照的であることが明らかになるだろう。同じく逃避行でありながら、通念に照らしてみればジョバンニのそれは不幸な少年としてまっとうであり、王子のそれは幸福な青年として不可解なものである。後者の不可解さこそ作者の不可解さにつながるものであることは言うまでもない。冒頭に示した「ぼくはみんなから、まるで狐のやうに見えるんだ」というつぶやきに関して言えば、それはあくまで不幸な少年として自然なものであり、決して作者に重ねられる必要はない。賢治における「社会的被害」の自覚とはその「財ばつと云はれるもの」（前掲書簡に同じ）＝特権的幸福によるのであり、ジョバンニの不幸とは対極にあるものだからである。ジョバンニはあくまでふつうの少年として父の帰還と母の病気の回復を願っているのであり、作者からはきっぱりと自立した主人公なのである。

同様に、カムパネルラにトシや保阪の投影を過剰に読み込むことにも慎重であるべきだろう。少なくとも物語の中では、所属していた集団からはじき出された主人公が、絶望して一人とだけの親交を望むという形をとっていることに注目せねばならない。それは明らかに賢治のトシや保阪との関係とは異っている。賢治がトシや保阪を失ったことを悲しんだのは、信仰という共同性に生きる同志を失ったからであり（トシ）、また、同志をついに得られなかった（保阪）からである。そこに共同性そのものに対する絶望はないのだ。ここで視野に入れるべきなのは、おそらく賢治自身の経験に基くと思われる次の洞察である。

この不可思議な大きな心象宙宇のなかで
もしも正しいねがひに燃えて
じぶんとひとと万象といっしょに
至上福しにいたらうとする
それをある宗教的情操とするならば
そのねがひから砕けまたは疲れ
じぶんとそれからたったひとつのたましひと
完全そして永久にどこまでもいっしょに行かうとする

この変態を変愛といふ

（「小岩井農場パート九」部分）

かつて境忠一氏の指摘があり[3]、近くは牧野立雄氏によって遠藤智恵子という名が明らかにされた[4]ように、農学校教師時代の賢治は激しい恋情にとらえられていた。その修羅意識の成立には、万人の究極の幸福を求めんとする「まことの道」の一員たることから脱落し、眼前のただ一人の異性とのみの幸福をねがう自己自身に対する強い否定意識がかかわっていたにちがいない。そのような経験があって初めてこの洞察は可能だったのである。

もちろん、物語でのジョバンニが万人の「至上福し」を願っていたわけではない。しかし、父の不在をきっかけとして仲間から疎外されていくからこそカムパネルラとの永遠の同伴を願うのであり、物語が「小岩井農場パート九」に示された人間洞察に添った「自己救済」にまつわる葛藤をテーマとして形成されていることは明らかである。すなわち、この物語に主人公の個から類への自己開放を見出すだけでは十分でなく、類から個へさらに高度の類へと向う往復運動による魂の成長を見出すべきであるし、作者の現実を呼びよせるのであれば、トシや保阪との関係だけではなく、自己の恋愛経験をも視野に収めた深い人間洞察をも含み入れるべきなのだ。

さらにまた、主人公が死後の世界たる天上の幻想空間を経めぐるというストーリーも、必ずしもトシの死による作者の衝撃にのみ帰せられる必要はあるまい。「死して生まれよ」は古来魂の再生のための必須のテーゼであり、現実に絶望した少年が文字通りの死後の世界を経て回生を得ることは、まことに理に叶ったことなのである。

かくして、「銀河鉄道の夜」は不幸な少年を主人公とするいかにもオーソドックスな設定を持つ「少年小説」であると言うことができる。しかし、描かれた幻想空間はおそらく「少年」の理解をこえるものである。ここに至っては、賢治の「思想」とそれを形成したものを援用する他はない。

二

「銀河鉄道の夜」に表現された幻想空間をどのように受け止めるかは大きな問題である。冒頭部分のあふれんばかりの光の描写と、報告されている臨死体験との類似に注目した河合隼雄氏は、妹トシの死を悲しむ余り賢治自身が瀕死体験をしたのではないかという仮説を提出している[5]し、桑原啓善氏は「わがうち秘めし／異事の数、幽界の〈こ〉／異空間」（「兄妹像手帳」）というメモの通り、物語の枠組みは賢治の想像ではなく実体験に基いていると主張している[6]。両説に強い説得力を認めざるを得ないが、作品論を越える問題である以上、これに深入りすることはできない。ここでは、すでに指摘のあるジョン・バンヤンの「天路歴程[7]」、ダンテの「神曲[8]」、ギリシャ神話の中の「オルフェ神話[9]」、『法華経』の「化城喩品[10]」、霊界遍歴譚としての「毘沙門の本地[11]」等と並んで作品の構成に影響を与えたと推察されるものとして、『聖書』の「黙示録」を取り上げ、幻想空間理解の手がかりとしてみたい。

「銀河鉄道の夜」と「黙示録」、特に「ヨハネの黙示録」の関連については早くに佐藤泰正氏の指摘があり、上田哲氏も賢治の「〈異空間〉信仰」の物語化として作品を読み取る立場から、「銀河鉄道

の夜」に黙示録的本質を見ている。[12] ここではさらに歩を進めて、できるだけ詳細に「黙示録」の本質や「ヨハネの黙示録」の特質を探るところから始めてみよう。

まず、「黙示録」とは何か。

①、「黙示」（アポカリュプシス、アポカリプス）とは、隠された事柄（秘密、秘義、奥義）が顕わになること、見えないものが見えるようになることである。これらは本来神にのみ属する事柄で、人間は知ることを許されないものである。

②、①はいずれも神が特定の人間に秘密を啓示するという形をとる。枠組としては、筆者（異現象を見る者）が天使に導かれてまぼろしを見、さらにその意味の解き明しをされるというものが多い。

③、啓示されるのは将来の出来事であるが、その意義は現在へ直接かかわり現在を規定する。

④、「奥義」に関しては二つの側面がある。宇宙の秩序や天体の性質、運行、天上界や冥府などの領域に関する宇宙的側面と、人類や世界の将来、特に近づいている現世の終末と人類の審判などに関する時間的、歴史的側面である。

⑤、④のうち重要なのは後者、つまり「時」に関する奥義である。この世は終末に近づいており、やがて来る「大いなる患難の日」と、審判によって神の支配が確立するという期待と、それがいつどのようにして来るかということが啓示される。

では、作者に直接影響を与えたと思われる「ヨハネの黙示録」とは何か。

⑥、成立はローマ帝国、ドミティアヌス皇帝の統治時代（A・D81～96）の終り頃と考えられる。ドミティアヌス帝は生存中帝国のすべての臣下から神としての尊崇を受けることを要求し、そのためイエスを神の子と信ずる者達を圧迫、迫害した。

⑦、「ヨハネの黙示録」が聖書に入るべき正典として全キリスト教会から承認されるまでには曲折があり、正式に編入されたのは四世紀後半である。

⑧、「ヨハネの黙示録」の要点。（引用は日本聖書教会版による）

a、受難とそれ故の啓示。「わたしヨハネは、神の言（ことば）とイエスのあかしとのゆえに、（流されて）パトモスという島にいた。ところがわたしは、主の日に御霊に感じた。そして、わたしのうしろの方で、ラッパのような声がするのを聞いた。」（1章9節以下）

b．選ばれた者への啓示。「勝利を得る者には隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この石の上には、これを受ける者のほかだれも知らない新しい名が書いてある。」（2章17節）

c、選ばれた者の権力の獲得。「勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。」（2章26節以下）

d．七つのラッパが鳴り、迫害者への過烈な災いが次々と起る（9章5節以下）。「その災厄の様子は悪魔的なものにまで拡大している。」（NTD新約聖書註解）

e、千年王国。最後の審判。新しい世界の誕生。（20章・21章）

⑨、歴史観。歴史は次第に発展し、成熟し、最後に完成に到達するのではない。むしろその終末は世界のあらゆる人間に対する審きであり、この終末（世界の滅亡）こそ神の支配による新しい世界の始りである。

⑩、見者ヨハネと使徒ヨハネの相違。両者は同一視されることもあったが、全く違う人物と考える方が適切である。見者ヨハネ＝黙示録的歴史像をキリストの十字架、復活、再臨と結合させた。これによって諸教会の苦難の意味を示し、励しと慰めを与えようとした。使徒ヨハネ＝信ずる者はいまここで全き救いを受けるのであり、終末は必要ではない。

⑪、価値づけ。カルヴァンは新約聖書のすべての文章について註解書を書いたが、「ヨハネの黙示録」については書かなかった。ルターはこの書を「使徒的権威のあるものとも預言的権威のあるものとも見なすことができない」と述べ、ただ信徒の慰めと、信仰的な躓きを避ける警告としてのみ意味を認めた。[13]

改めて言うまでもなく、主人公ジョバンニの名は聖書に登場するヨハネのイタリア名である。主人公がこの名でなくてはならないのは、その孤独と疎外が「黙示」を受けるための必須の条件であるからである。国土を失い流浪するユダヤ民族に神の「黙示」が下り、信仰ゆえに弾圧されたヨハネが神の言葉を聞く者として選ばれたように、「ぼくはどうして、カムパネルラのやうに生まれなかったらう」「ぼくはどこへもあそびに行くとこがない。ぼくはみんなから、まるで狐（きつね）のやうに見えるんだ」と嘆き、「俄（には）かにまたちからいっぱい」町から走り出るジョバンニのみが、死者しか乗車できないはずの銀河鉄道の乗客となることを許されるのだ。「銀河鉄道の夜」とは、地上の夜たる「ケンタウル祭の夜」とは全く異質の、天上における「もう一つの夜」のことに他ならぬが、「もう一つの夜」の秘義の世界に参入する資格はかくも厳しいのである。

②や⑧のaに従って言えば、物語は「神」ならぬ「ブルカニロ博士」がヨハネならぬジョバンニを選び、「ラッパのような大きな声」（「ヨハネ黙示録」1章10節）ならぬ「セロのやうな声」に導かれて天上に向い、「みんながカムパネルラだ」という啓示を受け、さらにその意味の解き明しを受ける、という構造を持つのであり、ジョバンニが気づかぬうちにポケットに入っていた「いちめん黒い唐草のやうな模様の中に、をかしな十ばかりの字を印刷した」切符は、⑧のbの見者ヨハネが受ける「受ける者のほか誰も知らない新しい名が書いてある」白い石と同様の「選ばれた者」のしるしなのである。

しかし、ここで注意せねばならないのは、ここまではたしかにヨハネ黙示録が援用されたにせよ、「銀河鉄道の夜」には⑧のc、dに示されている「選ばれた者の権力の獲得」や、「迫害者への過烈な災い」がどこにも登場しないということである。通常の伝承民話や童話が、多かれ少なかれ弱小な主人公を迫害した者は裁かれ滅びに至るという黙示録的な結末をもっていることを考えれば、ジョバンニを意地悪く疎外したザネリに何らかの報いがあってもいいのだが、物語は全く逆に展開する。川で溺れかかったザネリは救われ、ジョバンニをよく理解しひどい言葉を吐くこともなかったカムパネ

ルラの方が死亡するのである。さらに、船の事故に遭遇し、他者を押しのけてまで助かろうとはせず死亡した大学生と姉弟が登場し、その姉の口から、いたちから逃げようとして井戸に落ちた蠍の、「あゝなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったらう。そしたらいたちも一日生きのびたらうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。」という祈りが語られる。この三例を偶発的献身、消極的献身、積極的献身（ただし祈りにとどまる）と考えうるとすれば、ジョバンニに与えられる「啓示」がさらに一歩進んだ積極的献身の実行であることは当然である。ジョバンニの手にした「たった一つのほんたうの切符」は、他者に罰を下し支配するためではなく、仕え愛するために与えられたのである。

イギリスの作家D・H・ロレンスは、ヨハネ黙示録に抑圧された[14]民象の裏返された権力意識をかぎとり鋭く批判しているし、カルヴァンやルター[11]のような態度をとらせたのも同様の理由によると推察されるが、逆に言えば、通常の人間的感情はどうしても、黙示録的本質を逃れられないということでもある。そういう意味ではこの物語は、人間の自然感情から逸脱した高度に宗教的な結末を用意したことになるのであり、「少年の読みものとしてはこれは無理だ」という浅野晃氏の感慨[15]も決して不当ではないのだ。

しかし、賢治自身をふり返ったとき、彼が一貫して通常の人間的感情を超越していたと言うことはできない。賢治もまた、明白にこの世の終末と審きを夢想したことがあったのである。

あっちもこっちも／ひとさわぎおこして／いっぱい呑みたい
やつらばかりだ／羊歯の葉と雲／世界はそんなにつめたく暗い
／けれどもまもなく／さういふやつらは／ひとりでに腐って／
ひとりでに雨に流される／あとはしんとした青い羊歯ばかり／
そしてそれが人間の石炭紀であったと／どこかの透明な地質学
者が記録するであらう　（「詩ノート　一〇五三政治家」）

風が吹いて／日が暮れかゝり／麦のうねがみな／うるんで見
えること／石河原の大小の鍬／まっしろに発火しだした／また
労れて死ぬる支那の苦力や働いたために子を生み悩む農婦たち
／またこの人たちが／みなうつつとも夢ともわかぬなかに云う
／おまへらは／わたくしの名を知らぬのか／わたくしはエス／
おまへらに／ふたゝび／あらはれることをば約したる　神のひ
とり子エスである。　（「詩ノート　一〇四九基督再臨」）

昭和二年の春に書かれたこれらの作品は、「銀河鉄道の夜」初期形の成立後、実践活動へ踏み出してからのものである。現実により密着し、農民たちの辛苦や愚劣と自己の無力を知れば知るだけ、賢治にもまた、この世の根底からの浄化と神の支配が夢想されたのであろう。しかしもちろん、これらの心情は後期形へ向けての推敲の過程でも物語の中に持ちこまれることはなかった。「よだかの星」に明白なように、賢治の場合、虐げられた者はそれによって自己もまた虐げる者であることを知りこそすれ、立場を逆転することを夢みることはないのである。

かくして、「銀河鉄道の夜」とは「反転された黙示録」であると言うことができる。それは未来が変容することによって現在を耐え

るのではなく、自己が変容することによって未来を切り拓いて行くものなのである。

三

初期形のテキストを読み進めて行くと、想像力による描写というには余りに具体的な情景につき当る。作者が自己の体験の生々しさゆえにそれを書き記さずにはおれなかったように思え、前述の実体験説が浮上することになるのだが、ジョバンニとカムパネルラが銀河ステーションにいることを告げる「前からでもうしろからでもないふしぎな声」もその一つである。それは天上界を案内する「セロのやうな声」につづいて響いて来るが、奇妙なことに、「その語が少しもジョバンニの知らない語なのに、その意味はちゃんとわかる」のである。この声は「銀河ステーション」の章の冒頭にのみ登場し、改稿された後期形では「ふしぎな声」とだけ記され、その内実は抹消される。それにしても、作者はなぜこのようなエピソードを挿入したのだろうか。

私見によれば、これは宗教的な啓示を受ける際の神秘体験に極めて類似している。一例として、イスラム教の創始者マホメットが神の啓示を受ける際の形態をとりあげてみよう。聖典『コーラン』には、「神のことば」は何物も見えずただ垂幕のうしろから聞こえてくるとしか記されていないが、井筒俊彦氏によれば、マホメットの言動を伝える「聖伝集」には、「神の啓示がどのようにして下るのか」という問に対して、マホメットが「ある場合には、それは鈴のジャラジャラという音のように（中略）やって来る。私にとってこれが一番苦しい啓示の下り方だ。やがて、鈴の音は私を放して遠ざかる。そのとき、ふと気がつくと、神が私に語ろうとしたことが、この鈴の音から私に了解されていたことを私は意識する。」と答えたエピソードがあるという。[16] 井筒氏は、「鈴のジャラジャラいう音」は原語では「何やらわけのわからぬ音」とも解釈できる「非言語的な音」であり、「それが消えたとたん、いわば自動的に言語記号に解釈される」と述べている。『聖書』にも不可解な「異言を語る者」はたびたび登場する。[17]

ここに共通して登場する「非言語的言語」は、すでに指摘のあるように「原言語」とでも呼ぶべきものである。[18] つまり、地上で各民族語として分立する以前の、天上に属する「天のものなる言語」＝「原言語」である。ジョバンニは天上で、マホメットやキリスト教徒たちは地上でそれを聞いたのである。より内実に迫るため、テキストを少しさかのぼって引用する。

するとちゃうど、それに返事をするやうに、どこか遠くの遠くのもやの中から、セロのやうなごうごうした声がきこえて来ました。

（ひかりといふものは、ひとつのエネルギーだよ。お菓子や三角標も、みんないろいろに組みあげられたエネルギーが、またいろいろに組みあげられてできてゐる。だから規則さへさうならば、ひかりがお菓子になることもあるのだ。たゞおまへは、いままでそんな規則のとこに居なかっただけだ。ここらはまるで約束がちがふからな。）

ジョバンニは、わかったやうな、わからないやうな、をかし

な気がして、だまってそこらを見てゐました。
　するとこんどは、前からでも後からでもどこからでもないふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと聞こえました。そしていよいよをかしいことは、その語が、少しもジョバンニの知らない語なのに、その意味はちゃんとわかるのでした。
　ぼんやりと立っていた「青じろいひかり」が、突然「新しく灼いたばかりの古い鋼の板」でできたような三角標に変化したのを見て驚いたジョバンニを、「セロのやうな声」が教え諭す場面につづいて「非言語的言語」が登場している。それはおそらく偶然ではない。つまり、天上ではすべての物質はその形態を失いエネルギーに還元されているゆえに、自在な変容が可能なのであるが、同様に、言語もまた、各民族語という形態を失い原言語に還元されているのだから、あらゆる民族の人間に自在に理解可能なのだ。スチームや電気の動力源なしに汽車が走ったり、疲れることもなく意のままに「風のやうに走れた」り、「苹果だってお菓子だってかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによってちがったわづかのいゝかをりになって毛あなからちらけてしまふ」のも、ここではすべての存在が物質的制約といふ重い衣装をぬぎすてているからなのである。
　このような描写はおそらく「倶舎論」を根拠とする賢治の天上界の知識にも基づいているのであろうし、科学的には「黒と白との細胞のあらゆる順列をつくり　それをばその細胞がその細胞自身と感じてゐて／それが意識の流れであり／その細胞がまた多くの電子系順列からできているので／畢竟わたくしとはわたくし自身が／わたくしとして感ずる電子系のある系統を云ふものである」（「詩ノート一〇一六」）という物質の電子還元論に源を発するものであろう。「唯物論要ハ人類ノ感官ニヨリテ立ツ。人類ノ感官ノミヨク実相ヲ得ルト云と得ズ」（「兄弟像手帳」）という神秘体験に基づく信念も力にあずかったにちがいない。いずれにせよ、物質的制約をのがれた天上界では存在の真実の相貌が現われるのであり、そういう空間こそが、「幻想四次元」の空間なのである。
　ジョバンニはこのような旅の終りにカムパネルラとの悲痛な別れを経験し、「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人」に会うのだが、それは彼の経験がこの大人の「変な顔をしてはいけない。ぼくたちはぼくのからだだって天の川だって汽車だってたゞさう感じてゐるのだから」という言葉に収斂されるためであったと言うことができる。この作者賢治を思わせる人物は幻像さえ生起させてジョンバンニを喩そうとする。
　そのひとは指を一本あげてしづかにそれをおろしました。するといきなりジョンバンニは自分といふものがじぶんの考といふものが、汽車やその学者や天の川やみんないっしょにぽかっと光ってしゃんとなくなってぽかっとともってまたなくなってそしてその一つがぽかっとともるとあらゆる広い世界ががらんとひらけあらゆる歴史がそなはりすっと消えるともうがらんとしたゞもうそれっきりになってしまふのを見ました。だんだんそれが早くなくなってまもなくすっかりもとのとほりになりました。

いくら銀河鉄道の旅を経験して来たとはいえ、年若いジョバンニには理解できそうもない光景である。地理や歴史も含めあらゆる存在が実在ではなく仮象である、ということであろうが、やはりこのメッセージの前提には、仏教の根本教義の一つである「色即是空空即是色」という認識があったことを指摘せねばならない。桑原啓善氏は、地上人であるジョバンニに「空」と見えるものが天上にあっては実在であり（プリシオン海岸の発掘の項参照）、それこそが生命の母胎としての光のエネルギーであると述べて、「銀河鉄道の夜」を「空文学」と規定している[19]が、それが反転されたものこそジョバンニに示された光景なのだ。「みんないっしょにぽかっと光って」という表現に注目すれば、我々が実体として感受しているものの本質は「空」であり、「空」であることにおいてすべてが一致することが強調されていることは明らかであろう。今、この教義の核心を口語訳で引用する。

この世においては、物質的現象には実体がないのであり、実体がないからこそ、物質的現象で（あり得る）のである。実体がないといっても、それは物質的現象を離れてはいない。また、物質的現象は、実体がないことを離れて物質的現象であるのではない。（このようにして、）およそ物質的現象というものは、すべて、実体がないことである。およそ実体がないということは、物質的現象なのである。これと同じように、感覚も、表象も、意志も、知識も、すべて実体がないのである。（「般若波羅蜜多心経」[20]）

周知のように、このような宗教的認識は賢治の学んだ自然科学、特に化学の認識と何ら矛盾しないものであった。斎藤文一氏によれば、賢治は高等農林時代に学んだ片山正夫の『化学本論』に多大の影響を受け、それは彼に「熱力学的自然観」を与えることとなった。

物質は固体、液体、気体などの質的に異る相を持つとしても、それは偶然的なものであって、内在する状態変数のそれぞれの量的な値によって指定される、本質的に一つの物質であるということが、ますますあきらかにされていくように見えた。（中略）重要なものは、「物質」よりもその根底にある、「状態」である。相は転移し、たとえば水は氷になるであろう。それは「状態」の変数に支配される。物質は法則的な存在である。物質はその姿を変え、また変えうるのである。それは変幻相を持つ。そのことを賢治は見た。そして生命あるものもまた物質ではなからうか！[21]

銀河の水が「水素よりももっとすきとほった」気体であったり、天の川の砂の上に降り立った鳥たちが「まるで雪の融けるやうに」縮まり、間もなく、「熔鉱炉から出た銅の汁のやうに、砂や砂利の上にひろがり」やがて消えていく、というエピソードを思い起こしてみよう。それらは単なる神秘ではなく「相の転移」という熱力学の法則の具体化なのである。地上では特別の条件のもとでしか起こりえないそれが、天上では日常のこととして生起しているのである。

こうして見てくれば、ジョバンニの受けた「啓示」の内実は明らかであろう。それは存在の本質が不変の「実体」ではなく変転してやまぬ「現象」であることの確認であり、初期形成立とほぼ同時期に出版された『春と修羅』の序文に言う「わたくしといふ現象は／

仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明です」という認識と二つのものではないのである。そうであってはじめて「みんながカムパネルラだ」という「個から類へ」の道筋が開示されると言うことができるのだ。

カムパネルラとは唯一絶対の実体ではなく、カムパネルラという現象として地上に存在した。その本質は「空」であり、死とは本質に帰ることであるから、「カムパネルラをさがしてもむだ」なのである。逆に、「空」であるという本質はいわゆる因縁によってあらゆる地上的存在を取りうることを意味する。ゆえに「みんながカムパネルラだ」と言いうる。このことが理解されてはじめて「あらゆるひとの幸福をさがすこと」と、「カムパネルラといつまでもいっしょに行」くことが等式で結ばれるのである。

四

「農民芸術概論綱要」は、大正十五年の初め、一月から三月にかけて国策によって開校された「岩手国民学校」での講義のためにまとめられたものである。冒頭の序論を引用する。

おれたちはみな農民であるずゐぶん忙がしく仕事もつらい
もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい
われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あった
近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい
世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない
自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する
この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある
正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである
われらは世界のまことの幸福を索ねよう　求道すでに道である

今、問題としたいのは「近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい」という一行である。なぜこの一行が挿入されているかは必ずしも分明ではないからである。この一行がなくても十分に論旨は通るのだ。だが、もしここに記された「求道たちの実験」が、「銀河鉄道の夜」の瘠せた大人の言う「もしおまへがほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考へとうその考へとを分けてしまへばその方法さへきまればもう信仰も化学と同じやうになる」や、ブルカニロ博士の「ありがたう。私は大へんいゝ実験をした。私はこんなしづかな場所で遠くから私の考を人に伝へる実験をしたいとさっき考へてゐた。」という「実験」と同じものだとすれば疑問は解決に近づくと思われる。

「求道者たちの実験」とは、瘠せた大人の語る文脈に投げ込んでみれば「自分の求める信仰が正しいかどうかの実験」ということになるが、語られている通り、その「方法」が簡単に決定できるとは思えない。宗教的能力も教義も千差万別であるからである。それが万人に開かれている「近代科学の実証」と大きく異るところなのだ。しかし、であればこそ、ジョバンニは選ばれてブルカニロ博士の「実験」を体験したのではなかったか。博士の「実験」とは何らかのテレパシィの実験[22]であり、ジョバンニはそれによって博士の想定す

る幻想空間に投げ込まれ、その反応が手帳に記録されたと考えられるが、一人の不幸な少年がその体験によって再び生きる勇気を得たのだから、少なくともブルカニロ博士の信じる天上界の正しさは証明されたことになるだろう。そして、賢治自身がジョバンニのように幻想空間をめぐったことは考えられても、ブルカニロ博士のような「実験」を他者に施したとは考えにくいとすれば、このような物語を書くこと自体が、求道者としての賢治自身の精一杯の「実験」だったと言うこともできるのである。

とすれば、賢治は、誰よりも国民学校の生徒たちや農学校の教え子たちのためにこの物語を書いたとは言えないだろうか。物語の主人公と同じく「ずゐぶん忙しく仕事もつらい」農民の子弟たちが物語を読み、科学的真実と宗教的真実が一致し、存在がその根源において一つであることを知るとき、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に変化する」という賢治の直観が「われらの直観」となることが可能なのだ。そうであってはじめて、それまでとは全くちがった生の地平と、勉学の意味が生徒の前に切り拓かれるはずなのである。しかし、この啓蒙的少年小説は草稿のまま机上に置かれた。そして、実践活動の挫折を経験した作者によって、その啓蒙的表現のほとんどすべてが削除されるのである。

注

(1) 佐藤通雅『宮沢賢治の文学世界――短歌と童話――』　泰流社　昭54・11

(2) 中村稔『宮沢賢治』　筑摩書房　昭47・4

(3) 境忠一『宮沢賢治の愛』　主婦の友社　昭53・3

(4) 牧野立雄『隠された恋』　れんが書房新社　平2・6

(5) 河合隼雄「瀕死体験と銀河鉄道」「國文学」昭61・5臨時増刊号　學燈社

(6) 桑原啓善「異次元世界を描写してみせた『銀河鉄道の夜』」「宮沢賢治」第7号　洋々社　昭62・11

(7) 内田朝雄『私の宮沢賢治』農山漁村文化協会　昭56・6

(8) 新倉俊一「宮沢賢治と夢物語――『神曲』的幻想空間――」「星座」第6号　矢立出版　昭59・7

(9) 入沢康夫・天沢退二郎『討議「銀河鉄道の夜」とは何か』青土社　昭54・12

(10) 吉本隆明「賢治文学におけるユートピア」「國文學」昭53・2号　學燈社

(11) 和田寛「『銀河鉄道の夜』の仏教宇宙観――『毘沙門の本地』との類似を中心に――」「四次元実験工房」15号　矢立出版　平3・3

(12) 佐藤泰正『日本近代詩とキリスト教』　新教出版社　昭43・11　上田哲『宮沢賢治　その理想世界への道程』　明治書院　昭60・1

(13) 「黙示録」の概要については次のものを中心に参照した。矢内原忠雄『聖書講義Ⅳ黙示録』　岩波書店　昭53・3　初出角川書店　昭25・12　『NTD新約聖書註解　ヨハネの黙示録』NTD新約聖書註解刊行会　昭48・12　関根正雄・新見宏『聖書の世界　別巻Ⅰ旧約Ⅰ知恵と黙示』講談社　昭49・

6

(14) D・H・ロレンス『現代人は愛しうるか』(原題『アポカリプス論』) 福田恒存訳　中公文庫　昭57・6

(15) 浅野晃「『銀河鉄道の夜』閑話」「解釈と鑑賞」　昭59・11号　至文堂

(16) 井筒俊彦『超越のことば　イスラム・ユダヤ哲学における神と人』　岩波書店　平3・5

(17) たとえば「使徒行伝」10章46節、19章6節、「コリント人への第一の手紙」12～14章など。

(18) 「原言語」についてはすでに入沢・天沢両氏の言及がある。しかし「バベルの塔以前の言語世界」という言及のみで宗教的神秘体験についてはふれられていない。前掲書(9)に同じ

(19) (6)に同じ。

(20) 中村元・三枝充悳『バウッダ・佛教』　小学館　昭62・3

賢治がこの経文に親しんでいたことは詩「有明」(『春と修羅』第一集) に明らかである。

(21) 斎藤文一『宮沢賢治とその展開』　国文社　昭51・10

(22) 賢治がテレパシイ (精神交感) に興味を示し文献も読んでいたことについては小野隆祥氏に詳しい指摘がある。

『宮沢賢治の思索と信仰』泰流社　昭54・12